教養科目大人数授業へのアクティブラーニングの導入

研究代表者　上垣　豊
共同研究者　田口　律男
竹内　綱史
東山　薫
入谷　秀一
藤原　崇人
渋谷　亮

1. 今年度の計画

前年度の FD の公開講演から、大人数講義科目で導入可能なアクティブラーニングの方法について学んだ。大人数科目でアクティブラーニングへの導入には、相当な労力と時間を要することが分かった。また TA の活用も欠かせない。また、教授内容の変更、授業で教授する知識の量の減少が避けられないので、どのようにして教授内容を精選するかも課題である。ただし、時間が不足していたため、本学の教養科目に適用可能と考えられるアクティブラーニングの方法、すなわち、負担が比較的かからずに、一定の効果を得ることができる方法の検討を行うことができなかった。

そこで、今年度の到達目標を次のように定めた。

1)今年度の試行結果と前年度の報告内容とを比較したうえで、龍谷大学の教養科目でアクティブラーニングを導入することによって期待される効果を検討する。
2) アクティブラーニング導入の際に、全体の授業計画がどのように変化する(どこまで教授する知識の量をそぎ落とすことができるか、どの授業回に実施するのかが適切か)のか、試行例をとおして検証する。
3)他大学の視察、授業見学などから大人数授業でアクティブラーニングを導入する際の前提条件(TA の利用、準備に必要なことなど)を明らかにする。

そのために、本年度は次のような取り組みを行なうにした。

1)前年度の報告、とくに公開講演をもとに、龍谷大学深草学舎・教養科目、とくに講義科目での大人数講義で活用可能な方法、すなわち負担が比較的かからずに一定の効果を得ることができる方法を検討する。
2)先進的な授業を行っている大学を視察し、授業を見学する。
3)龍谷大学深草学舎・教養科目の人文科学系のいずれかの科目の大人数講義でアクティブラーニングを導入した授業を試行的に実施する。
4)PJ メンバーが中心となってアクティブラーニングの実践報告会を開催する。学外から講師を招き、コメントをいただく。

2. 香川大学への出張

この計画に基づき、香川大学に出張して先進的な授業を見学した。その報告は下記のとおりである。

出張者名：　竹内綱史准教授（経営学部）・渋谷亮准教授（文学部）
出張月日：　2019 年 11 月 18 日（月）～2019 年 11 月 19 日（火）

出張先：　香川大学
出張内容：
　11/18（月）：佐藤慶太先生（香川大学　大学教育基盤センター准教授）の 4 時間目（14:40-16:10）の授業（「倫理学 II」）を見学した。グループワークの進め方、特にディスカッションの時間の取り方とその共有の仕方など、多くの点を学ぶことができた。授業後、グループワークのコツなどについて 2 時間ほど話をうかがった。特にディスカッションを教室全体で共有する際に、どのように板書を使うかという点などについて、参考文献も含めて、大変有益なことを教えていただいた。
　11/19（火）：9 時から 1 時間程度、今年竣工した「総合研究棟」を見学した。総合研究棟はアクティブラーニング用の部屋（「多目的室」）が多数用意され、大小さまざまな部屋とその設備を見学した。多目的室は壁が全面ホワイトボードで、前日の授業見学の際も話題となった板書の問題が大きく改善されるように設計されている。また、可動式の机や椅子はもちろんのこと、グループワーク用の小さなホワイトボードも多数用意されており、どういう形でアクティブラーニングを進めるかも佐藤先生から説明していただき、大変参考になった。

3. AL を導入した授業の試行的実施

　3.-1「大学論」(5 人の教員によるリレー講義、週 1 回で半期 15 回の科目。前期と後期に開講)の授業で AL を導入した授業を試行的に実施した。
　まず前期では、予備的な作業として、事前準備などにどのような問題が生じるのかを具体的に把握するために、前期の授業の最後の回にグループ学習を行った。（なお、同じ前期の「大学論」で担当者の一人の小峯教授（経済学部）がグループ学習の実践を行っているが、小峯教授はこの FDpj メンバーではないので、この報告書の対象にはなっていない。）最終回はりリレー講義の担当者全員が出てきて、受講生から募ったテーマに沿って学生と討論をすることになっている。今回はテーマについてグループごとに学生の意見を言ってもらい、それを司会の学生がまとめて発表する形をとった。
　受講登録者は 116 名（文学部 16 名、経済学部 20 名、経営学部 12 名、法学部 8 名、政策学部 16 名、国際学部 44 名）であるが、通常の出席率は 2/3 で、最終回の出席率もあまり変わらなかった。1/3 ほどの学生が欠席もしくは遅刻したため、グループによって人数にばらつきが生じたため、人数の少ないグループを合併させることにした。ファシリテーター(司会)を選ぶ時間を短縮するために、最終回ではアルファベット順で決めた。AL を導入した授業経験が豊富な長谷川岳史教授（経営学部）が全体の司会をしてくれたおかげでスムーズに運営できた。前述のように、それぞれのグループでテーマについて学生の意見をまとめ、発表させる形をとった。それぞれのグループでのディスカッションをする時間はなかった。5 人の教員が出てきたので、授業をサポートできたが、一人の教員が行う場合は、教育補助員が必要なところである。また、「大学論」の最終回の授業では、担当教員が自分の意見を学生の前で述べるところが特色なのだが、今回はそれができなかった。
　コメントシートに書かれた学生の反応では、ほかの学部の学生の意見が聞けて良かった、という内容のものが多かった。

4. AL を導入した授業の実践報告

　後期に、同じ「大学論」の授業で pj メンバーの竹内が AL を用いた実践を行った。その概要は、佐藤慶太先生(香川大学　大学教育基盤センター准教授)をコメンテーターに招いて、2020 年 2 月 26 日に深草学舎紫英館第 6 共同研究室で開催された実践報告会で紹介された。以下はその実践報告会の概要である。

　報告者　竹内綱史

■　「大学論」での AL(アクティブラーニング)実践の概要

◇　「大学論」二年次の前期と後期に開講されている科目で、5 人の教員によるリレー講義。その後期開講の授業で AL を実践した。後期の登録者数は 119 名で、学部別の内訳は、文学部 23 名、経済学部 15 名、経営学部 9 名、法学部 11 名、政策学部 30 名、国際学部 31 名であった。竹内担当回は第 11 回から第 14 回。竹内担当部分のテーマは「大学とはいかにあるべきかを考える」である。

◇ グループワークの実践

第 12 回(竹内担当の第 2 回)の授業でグループワークを実践した。前回(第 11 回)の授業中に受講生に書いてもらったミニレポートに、担当者が朱入れをして授業の最初に返却し、それに基づいてグループワークをおこなわせた。

■　グループワークの詳細

◇　実施に当たって気をつけたこと

・全 15 回の授業の中で 1 回だけ行うものであり、またリレー講義で行うものであるため、「学生にとっての(心理的・作業的)ハードルをなるべく低くする」ことをこころがけた。具体的には、前回自分が書いたミニレポートを読み上げて、教員のコメントを紹介し、それに対する自分の考えを述べるだけ、という形にした。意見交換・ディスカッションは「義務」とはしなかった。

・6 学部共同開講の教養科目であることの利点を考え、各班にはなるべくまんべんなく入るようにした。

・欠席者が少なからずいるだろうということを予想し(実際の出席者は 119 人中 78 人だった)、班の人数は、全員出席だと少し多めの 10 名を基本とした(全 12 班)。また、各班に「班長」「副班長」をあらかじめ指名しておいて(名簿からランダムに)、班長がいれば司会をしてもらい、班長がいなければ副班長に司会をしてもらった。

・固定机の教室だったので、3 列以上に分かれて座るのでなく(そうすると輪から外れる人がでる)、必ず 2 列で向いあうように座るように指示した。

◇ 事前準備

- シラバスに「グループワークを行う場合がある」ことを明記。
- 前の回の授業(第 11 回・竹内担当分の第 1 回)で、「次回はグループワークをしてもらう」ことを告知したうえで、その際の「元原稿」となるミニレポートを学生に書いてもらった。
- 当日までにそのミニレポートに朱を入れ、なるべく内容的な「反論」を書いた。
- 班分け用の名簿を作成。班長・副班長も決めておいた。
- グループワークの流れをレジュメに記載。
- アイスブレイク用に「三つ選んで自己紹介」の表をレジュメに記載。
- 授業前に黒板に班ごとの座る場所を図で示しておいた。

◇ グループワークの流れ

- 授業全体のおおよその時間配分は、前回の振り返りおよびグループワークの説明 15 分・前回のミニレポート返却 15 分(この間に座席移動および返却されたミニレポートを見てグループワークで話すことを考えてもらった)・グループワーク 30 分・講義 20 分・ミニレポート 10 分。
- 班ごとに席に着いた時点で、出席者の少ない班には出席者の多い班から何人か移ってもらったりして人数調整。
- 司会(班長もしくは副班長)がすべての班にいるかどうかも確認。
- まずはアイスブレイクを兼ねて自己紹介。全部で 5 分程度。
- 自己紹介が終わったら、それぞれ前回のミニレポートについて発表。
- 発表が終わった班から、ディスカッションをしたければしてもらい、しない場合は「グループワークの感想」を書いてもらった。

・　全ての班の発表が終わった時点で終了。

■　反省点

◇　ミニレポートの返却に時間がかかってしまい、後ろの時間を圧迫してしまった。また、ミニレポートが最初に返却された人と最後に返却された人では、グループワークの準備(心構え)のために時間がかなり異なってしまった。

◇　班の人数をもう少し時間をかけて調整し、均等にするべきだった。終わる時間がまちまちになってしまい、かなり時間が余る班がでてしまった。

◇　話し方について等、基本的なことをもう少し説明しておくべきだったかもしれない(大きくはっきりと話すこと、どうしても無理な場合以外は話すときははマスクをとること等々。)

◇　班ごとの座る場所の図がわかりにくかった。

◇　前の回を欠席した学生は、発表で困ってしまった場合があった。

◇　遅刻してきた学生が全く入り込めない雰囲気になってしまっていた。

◇　もっとディスカッションをしたかったという学生が少なからずいた。

■　担当者の感想

◇　気づいた点

・学部によってグループワークに慣れている学部とそうでない学部にはっきり分かれている(政策学部は慣れていて文学部は慣れていない印象)。

・グループワークが明らかに得意な学生がいて、目立つが、それはごく一部。

・つまらなかったり苦手そうにしていたりする学生が多いと思ったが、その大半は緊張のせいだったようである。(やっている最中には手ごたえがあまりなかったが、学生の感想を読むと大半はかなり楽しんでいたようである。)

・学生はどうやら講義形式の授業にとにかく飽き飽きしているので、大講義でのグループワークという普通とは違うことをする「ワクワク感」があったようである。

◇　デメリット

・事前準備や授業そのものがかなり大変。(慣れの問題かもしれないが。)

・学修量はどうしても少なくなってしまう。教養科目が「幅広い知識」を身につけるということが目的であるのなら、目的からすこしずれてしまうかもしれない。

・「色んな人の意見が聞けて良かった」という感想が多かったが、それだったらどう考えても本を読んだほうが良いと思われる。

◇　メリット

・学生の満足度が予想をはるかに上回るほど高かった。

・学生の集中度もとても高く、学修の効率は良いと思われる。

・答えのない問題を「考える」時にはグループワークは有効だろう。

・他学部と一緒に授業でグループワークをする機会がほとんどないようなので、教養科目でやる意味は大いにあると思われる。

■　佐藤先生のコメントとそれに対する竹内先生の返答　(要旨)
(C:佐藤先生、　A:竹内)

C:朱を入れて返した後、グループワークを行うという順序は、良いと思う。グループワークの際に話の材料がないと、学生もなかなか話し合えないので。学生同士の話し合いをこのタイミングでいれた背景には、どのような考えがあったのか。

A:自分の意見を深めるということをしてほしかったので、12 回目に入れた。初回に入れ

るのは、ハードルを下げるか、あるいは変にハードルを上げることになるので、学生の反論を期待して、ハードルを下げるにしても学生が意見を言う形をとりたかった。

C：AL をさせてみて、学生から新しい知見が出てきたという手ごたえがあったのか。

A:学生の意見が変わっていく例はいくつかあった。ただしディスカッションによるものかどうかわからない。一方で、最初の意見を変えなかったが、自分の意見をディフェンスする形で意見を言う者が増えた。意見をガラッと変えた人はあまりいない。

C:事前準備の改善点としてどのようなことが考えられるか。たとえば、遅刻者にはグループワークをさせないということも考えられるが、そういうこともふくめて、うまくいくように事前準備をし過ぎると管理強化になるおそれもある。

A:上手にやらないと管理になる。11 回目(担当の初回)に大学で AL をする必要があるのか、とあらかじめ学生に問うて、考えさせたりもしている。AL をさせるとみんなそれなりに参加し、学士力の底上げにはなるだろうが、その一方で AL をしても意味があるのかと学生に挑発している。
AL は落ちこぼれを作らないという点では意味があるが、管理強化になり、伸ばせる学生を伸ばせなくなるおそれがある。

C:どのように学生参加のハードルを下げるべきかという問題に関して、竹内先生の考え方は参考になる。
それとは別に、いろいろな学部の学生が混在するようにグループを組んだ、という話があったが、学部の違いが意見の多様性をもたらす、ということが言えるか。もう少し説明してほしい。

A:なかなか説明しがたいが、それぞれの学部生の特徴が何かしら存在する。たとえば、文学部の学生ならば、仏教がらみでレポートを書いてくる傾向がある。

■ 討論
(C:コメンテーターの佐藤先生、A:竹内、Q:報告会の参加者)

Q:時間配分について、アイスブレイクだけで 30 分使ってしまい、時間が足らないのではないか。
A:結果的に全部で 30 分に収まった。意外に簡単に終わる。香川大学に出張して佐藤先生の授業を見学したが、先生の授業でも早く終わっている。
Q:朱を入れる労力とその効果についてもっと知りたい。
A:グループワークにはディスカッションを入れずに報告してもらった。添削して返されることによる効果はあった。
Q:テクニックのことになるが、反論を言わせるのが大事だと思う。反論のモデルをあらかじめ出していたのか。
A:一回だけでディスカッションに移すのはハードルを上げてしまうので、学生自身にその場で反論させるようなことはしていない。ミニレポートで反論を書かせたりしている。
Q:自分の意見を言わせるだけではディスカッションは続かないであろう。反論を書かせるのは良いと思う。
Q:ミニレポートの返却に時間がかかるのなら、班ごとにレポートを置いておき、学生にとりに来させるという方法がある。ただし、その場合はほかの学生に自分の成績がわかるというデメリットがある。
Q:星の数で書くとその問題はある程度緩和される。
C:封筒に入れて班ごとに並べるという方法がある。
A:朱を入れるのは学生が 100 人でも無理がある。当日の朝 4 時までかかった。

Q:パソコン教室ならば manaba course を使ってその場で朱を入れることができる。
A:朱を入れるのは今までもしていた。AL で満足度がこれほど上がったことに驚いた。
Q:自分の意見を言うのはできるが、ディスカッションや何かを決めるのはなかなか難しいという印象がある。大学教育の目標としてディスカッションまで行かせることができるのか。
C:思っていることを言うのはできるが、反論を言われてそれに返すのはなかなかできない。自分のことを言われ、それに対応する能力とはかなり違う。意見を言わせることと、反論、ディスカッションの間には溝がある。
A:ディスカッションは哲学では可能であるが、学問ジャンルによる違いがあるのではないか。
Q:倫理学の場合はテーマによる。大講義で AL を行うのは困難である。
Q:知識の定着を考えるだけならば、(ディスカッションまで進まなくても)意見を言わせるだけでも効果があるのではないか。
C:ディベイトは、議論のテクニック、批判の仕方を学ぶ、という性格が強い。訓練として行うべきではないか。必ずしも相手をやっつけることが目的にならない場合もあるので。
A:学生の満足度は高いが、「コミュ力」をあげる授業でよいのかという疑問がある。

5. 成果と課題

今回の FD の最大の成果は、他大学での先進的な経験に学び、一定の条件のもとで行えば、本学の教養科目の大人数授業でも AL による授業が可能であり、学生の満足度も高くなることが分かった点であろう。

事前準備で必要なことや留意すべきことも具体的にわかってきた。グルーピングの仕方、司会(ファシリテーター)の選び方、レポートの返却の仕方など共有可能な点は多い。また「反論を書かせる」のは竹内の実践の中でとくにユニークな点であるとして高く評価された。

ただし、竹内の実践では事前に学生のミニレポートに朱を入れて返すなど、担当教員の負担は相当なものがあった。教育補助員のサポートも期待できない状況では、半期 15 回の授業で AL を用いた授業を 1 回行うだけでもかなりの負担になる。継続して実践を続けるためには負担の軽減策を講じる必要があるだろう。

AL を導入した授業は「答えのない問題を考える」のには適しており、哲学などの分野では可能であろうが、歴史学や自然科学で実践するのはさらに工夫が必要であろう。ほかの科目、特にほかの学問分野の科目にどのようにして適用するのかが課題となるだろう。

また、「幅広い知識」を学ぶ教養科目の目的と矛盾する面もある。竹内が指摘するように、「コミュ力」を養うことだけが大学教育の目的ではないであろう。サポート体制の充実を前提にした話であるが、今後は AL の授業と通常の講義形式の授業をどのように組み合わせるのかが課題になってくるであろう。

(文責：上垣　豊)